

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

近代日本における基本漢字集合の系譜

—「文字のしるべ」・*Chinese Characters*・「三千字引」を中心に—

常葉大学教育学部 講師 岡墻 裕剛

要 旨

現代の日本で「基本的」だと認識される規範性をもつ漢字集合は、遡って考えるとその出自や変遷過程について未だ不明点が多い。このような立場から、稿者は近代日本における基本漢字集合を調査し、その起源と変遷の動態を解明することを目的とした研究を行ってきた。本稿では、チェンバレン『文字のしるべ』（1899）が参考にした文献を推定し、特にレイ *Chinese Characters*（1895）の調査から明らかになった郵便報知新聞の「三千字引」（1887）との関係について報告するとともに、近代以降の基本漢字集合同士の系譜とも言うべき関連性を示す。

1. はじめに

急速に情報機器が普及した現代社会の漢字使用の実情に対応するため、1981年に公布された「常用漢字表」が、2010年に196字を追加し5字を削除した2,136字へと改定された。この改定に際しては、新聞・ニュースなどのマスメディアで度々取り上げられるとともに、パブリックコメントの募集が行われるなど、専門家のみならず一般人をも交えて広く議論され、漢字に関するテーマとして注目を集めたのは記憶に新しい。

常用漢字表の改定について考えるワークショップを契機に発足した文字研究会では、「改定常用漢字表」の字体の不統一や字種の選定方法に関する問題点について具体的な言及が行われた¹。また、以前の「常用漢字表」（1981年）や、その土台となった「当用漢字表」（1946年）については、加藤（1989）や野村（2008）といった論考を始めとして、数々の批判や問題提起が行われてきた。そこには、これらの漢字表は成立の背景や方法論が不透明かつ不適切で、現実の漢字使用に即していないという主張が多く見られる。つまり、過去のものも含めて、日本における常用漢字や基本漢字といった集合体としての漢字はその成立の過程そのものに欠陥を有してきたと言え、取り扱われる字種・字体の変遷、字数の設定根拠、根拠・典拠として参考にした資料や、文献同士の影響関係を含めた系譜といった点については未だ解明されていないのである。

一方、近年の日本国内の施策を見ると、常用漢字表の改定以外にも「表外漢字字体表」の答申（2000年）や「人名用漢字」の488字の追加（2004年）があり、一般社会における漢字使用に関する意識の高まりやニーズの多様化を確認することができる。国外へと目を向けると、中国では2013年に『通用規範漢字表』が公布された。この表は、1988年の『現代漢語通用字表』をはじめ漢字に関する5種類の規範表をまとめなおしたもので、基礎教育用の一級字3500字、出版用の二級字3000字、人名・地名・科学技術・

1 文字研究会編（2009）『新常用漢字表の文字論』参照。これらの論考は単純な批判を意図するのではなく、問題意識をもって文字について考えることを目的とすると明言されている。

文語などの三級字 1605 字、計 8105 字の漢字を収録しており、中国全土の約 13 億人超へと影響を与える一大改革であった。さらには、漢字文化圏全域にわたって相互の情報交換を可能にするために、Unicode の統合漢字が制定され、現在も追加が続けられている。日中台韓越の漢字を同一の規格によって情報処理することが可能になったことで、改めて日本語における基本漢字及び拡張漢字の字種や、漢字文化圏に共通する基本漢字の字種・字体についての問題が顕在化してきた。国内外を問わず漢字を取り巻く環境は大きく変化を遂げる過渡期にあると捉えることができる。

こういった背景の下で、漢字を数千字単位の集合として捉え、その「漢字集合」がもつ性質や問題点について検討することは、価値のある研究だと言える。しかしながら、特定の漢字文献の調査や、個々の漢字についての通時的変遷を探る調査、共時的に日中韓での意味の差を比較するような漢字研究とは異なり、漢字集合研究は盛んとは言えないのが現状であり、一部の文字コードの問題に関連して情報处理的な観点からのアプローチが行われることがある程度である。そのため、現在の日本の漢字集合の原点・原典がどこに端を発するのかといったごく基礎的なことすらまだ判然としていない。

岡墻 (2008) では、このような目的意識の下に、現在最も普及している漢字集合である JIS 漢字について先行する漢字文献を調査し、明治期に活躍したイギリス人日本研究者であるチェンバレンの『文字のしるべ』(1899) がその上流に位置することを突き止めた。その結果、現在我々が認識する「基本的な漢字」という集合と概念そのものが、漢字の歴史から見ると極めて新しい近代という時代に確立し、しかもその成立と発展に西洋人が寄与していたことに言及した。

本稿ではこの視点を継承し、当時の西洋人との関連性からさらに漢字集合の系譜を遡ることを試みる。以下では、調査範囲を『文字のしるべ』以前の漢字文献へ広げることで見つかったレイ *Chinese Characters for the Use of Students of Japanese Language* (1895、以下 *Chinese Characters* と呼ぶ) が、外国人のための漢字学習書である『文字のしるべ』と、新聞の紙面での漢字削減による効率化を目的とした「郵便報知新聞」附録の「三千字字引」(1887 年) という性質を異にする 2 種類の漢字集合資料を結びつける重要な存在であったことについて報告する。

2. 『文字のしるべ』と基本漢字集合

2.1. チェンバレンと『文字のしるべ』についての先行研究

B. H. チェンバレン (1850-1935) は 1873 (明治 6) 年に来日したイギリス人で、日本での約 40 年間に行った日本語と日本文化を対象とした幅広い研究で知られる。特に『古事記』の英訳 (1883 年) は高く評価され、1886 (明治 19) 年には帝国大学文科大学の初代教師に就任し、後に外国人初の帝国大学名誉教師となった。チェンバレンは近代日本の言語学と国語学の成立・発展に大きく貢献しており、佐々木編 (1948) のようにアストン、サトウとあわせて明治期の西洋人三大日本学者と称することがある²。

2 Aston, William George (1841-1911)、Satow, Sir Ernest Mason (1843-1929) とともにイギリス人外交官で日本研究者でもあった。往復の書簡が残るなどチェンバレンとの交友も深かった。

その著書である『文字のしるべ』は、初版が1899（明治32）年、改訂再版が1905（明治38）年に出版された。初版は482ページで縦305mm×横230mm程度、再版は547ページで縦295mm×横222mm程度の大型の文献であり、厚みのある上質な紙を使用している。扉には日本語と英語のタイトルがあり、英語では *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*³、直訳すれば「日本語文字学習の実践的入門書」という意味をもつ。内容としては、外国人が明治の日本で生活するのに必要となる日本語の表記に関するものが中心で、特に「基本漢字」（“the Commonest Chinese Characters”）についての解説が大部分を占める。具体的には、12のSectionのうち、1～3までが口語の初級文法とひらがな・カタカナについて、4以降が基本漢字についての解説となっており、Sectionが進むごとに内容が高度化する。基本漢字は、初版2350、再版2490までの常用度を示すNo.が存在し、本文では難易度に沿って解説し、活字とともに「筆写字体」（“Writing Lesson”）を示す。本文は英語だが、図1のように日本語の例文や資料も大量に掲載する。Indexとしては『康熙字典』の部首分類に従った漢字表、音訓索引、語彙索引が存在する。また、付録に当たるAppendixでは、「基本漢字」習得後に実際の使用に出会った際の自習用として約2000の「追加漢字」を一覧する。既刊本の改訂を除くと、チェンパレンによる日本関係の最後の著作となった。



図1 『文字のしるべ』（初版 pp. 44-45）

『文字のしるべ』は、日本各地の図書館等に両版あわせて40～50冊が現存しており、

3 再版では末尾に“(Moji no Shirube)”が追加される。

岡墻（2008）で報告するとおり、その多くに使用者による書き込みが見られる。当時の外国人による日本語学習・漢字学習の実態を確認できる資料としても貴重である。

チェンバレンの研究活動については、村岡（1935）が1891-2（明治24-5）年を境に「研究の方面が多様に互り、努力の旺盛を示した」前期と「在來の研究の修補」の後期に分け、「後期の業績は、いづれも前期にいでた著書の改訂か、もしくは雑多の研究である」とする。この区分によると『文字のしるべ』は後期の業績になるが、上田（1899）の「チェムバレン氏の近業「文字のしるべ」は等しく我が國語學界に著るしき印象を與ふるものなる可し。（中略）好學の傾ある一般讀者にも興味饒なる近來の大著述なり。（中略）本書は漢字を習得せむとする外人に對して、極めて便利なる手引きなるのみならず、國語教育に意ある人にとりても少なからず、裨益する所あらむ」をはじめ、高く評価する向きも多い。

岡墻（2008）では、『文字のしるべ』における「基本漢字」の字種や字数の有用性が後の日本人に評価され、日下部重太郎「日下部表」⁴や大西雅雄『日本基本漢字』（1941）の内容に影響を与えたことに言及した。岡墻（2008）では漢字集合を公的・私的・情報処理関係の3種類に分類し分析を行ったが、当時の基本漢字文献の出自と目的の面からは、日本人による漢字節減の立場と西洋人の日本語習得のためという異なる系統にも区別できる。つまり、国語国字問題と日本語教育上の需要である。

近代化の中で日本の文字が西洋のアルファベットと比較して多すぎることから、経済化や学習の効率化のために漢字廃止・節減が叫ばれた。チェンバレンもかつてはローマ字による日本語表記を目指す「ローマ字会」の設立に協力し、漢字のデメリットを説いていた人物であった。この活動は志半ばで終わるのだが、『文字のしるべ』のSection 1では、「ローマ字会」と「かなのくわい」の失敗とを引き合いに出し、日本文化における文字の役割の大きさに言及するようになる。ここから、後期におけるチェンバレンの日本語・日本文化理解の転換を確認でき、「在來の研究の修補」期という評価が不適であり、日本理解がより深まった「研究の円熟期」であったと指摘できる。

2.2. 基本漢字の字種と字数

漢字廃止論・節減論は「漢字御廃止之議」（1866）に端を発すると言われ、その後、福沢諭吉『文字之教』（1873年、803字）、「三千字字引」（1887年）、「日下部表」6473字、「常用漢字表」約2000字など、字種と字数に異同が見られる。日本国外に目を向けると、東アジア全域では古来より「千字文」が手習いとして使用されており、近代の中国については塩崎（2003）が「パーカー（1896）によると、古典、二十四史、文学を読むためには12000字が必要であり（中略）ジャイルズは、もし中国語で新聞を出版する場合には約6000の文字数があれば十分である、とも述べている」とする。現代中国の『通用規範漢字表』（2013）は、基礎教育用の一級字3500字、出版用の二級字3000字、人名・

4 国語学者であった日下部重太郎（1876-1938）が作成した漢字表。作成時期と発表された文献によって、数種類が存在するが、ここでは『現代國語思潮』続編（1933）の附録「現代日本の実用漢字と別体漢字との調査及び「常用漢字」の価値の研究」を指す。同書で日下部は「実用漢字五千六百七十五字と別体漢字八百三字」と述べるが、池田（2001）は実用漢字5677字・別体漢字796字の計6473字を再集計の結果としている。

地名・科学技術・文語などの三級字 1605 字、計 8105 字を示す。このように目的・時代・地域によって漢字集合の規模と字種は変化するが、日本国内では概ね教育漢字 1000 字、常用基本漢字 2000～3000 字、使用漢字 6000 字以上といった数字で捉えられることが多い。

『文字のしるべ』の Section 1 では、同書の漢字数は東京の印刷所の活字調査に基づいて決定したとある。初版を元に該当部分の記述をまとめると、「日本国内で使用される漢字活字の総数は約 9500 字だが、低頻度や分野の限られたものを除くと個人としては 3000 字、学者は 4000 字程度を使用する。また、経験上高頻度だと感じた 1000 字は実際に活字も多く用意されており、それを元に増補した本書の 2350 字が目的に関わらず日本語学習者が習得すべき基本漢字である」となる⁵。この記述に続き、「低頻度の漢字でも他の漢字の学習を促すために紹介する例が僅かにある」という内容があり、学習の効率化のために意図的な字種選定を行ったことが明言されている⁶。

つまり、『文字のしるべ』の漢字は、チェンバレン自身が経験に基づいて選択し、続いて印刷所での活字の使用頻度調査による裏付けを経て日常的な漢字数と字種を決め、その後学習効果を高めるために改良を加えたものであり、主観的かつ客観的な 3 段階の手法により収録漢字の字種・字数の選定が行われたことが分かる。

2.3. 『文字のしるべ』とその参考資料

『文字のしるべ』の Preface にある “The compiler is under obligations to …” で始まる段落に注目すると、作成時に参照したと思われる文献と著者への言及が確認できる。それぞれの内容と本文の該当部分を引用し、調査により推測した人物名と文献の書誌情報と簡略な解説を一覧する⁷。

The compiler is under obligations to several Japanese authors. To ①**Mr. W. G. Aston, C. M. G.**, his thanks are due for permission to make use of some of **the paradigms** in the latter’s admirable *Grammar of the Japanese Written Language*. **The chief books consulted on the subject of the ideographs** have been ②**the Rev. Dr. Chalmers’s** too little known work on *The Structure of Chinese Characters*, and an essay by the ③**Rev. Dr. Faber** entitled *Prehistoric China*, published in Vol. XXIV, No. 2, of the “Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society;” furthermore — indeed very specially — the ④**late Dr. Wells Williams’s Syllabic Dictionary of the Chinese language**, which has been referred to for **almost every character** here given, and from which **definitions and derivations** have been frequently borrowed. ⑤**Mr.**

5 この活字調査については先行研究でもいくつかの言及があるが、特に上田（1899）は「漢字使用の範囲を知らむと欲して市内有数の印刷工場に問い合せ、之を基として全篇の構成を計れりなど、單純にして而も人の爲さざる點に注意したるものなり」と高く評価する。

6 例えば、「榎・椿・楸・柀」の中で、「楸」はそれほど基本的な漢字ではないが、「春夏秋冬」という部分字体の関係から他の漢字の習得に役立つと考え掲載するという記述がある。

7 引用中の斜体は本文ママ、太字・下線・番号は稿者による。なお、これらの文献は⑤を除き東京大学附属図書館と国立国会図書館で閲覧した。

Lay's Chinese-Japanese-English Dictionary and ⑥ Dr. Hepburn's and ⑦ Captain Brinkley's Japanese-English Dictionaries have also frequently been consulted with profit. The consideration that all foreign students of Japanese are certain to have one or other of the above-mentioned dictionaries at their elbow has allowed the definitions to be reduced to a minimum. It is assumed throughout that the student is acquainted with ⑧ the present writer's Handbook of Colloquial Japanese, and possesses a fair working knowledge of the spoken speech which that Handbook serves to elucidate. His thanks are due to his ⑨ Japanese assistant, Mr. Y. Ōno, without whose useful counsels and unremitting care the work could hardly have been carried to a successful issue.

• “the paradigms”

①Aston, William George (1841–1911)/*A Grammar of the Japanese Written Language*, Lane Crawford, 1877

イギリス人外交官アストンによる日本語の書き言葉の文法の手引き書。ローマ字で表記した日本語文の英語対訳とその説明が主で、発音・文法・動詞などの章立てに基づいて関連する内容を扱う。変体仮名の一覧表が存在するが、漢字の解説はほぼなく、本文中で数語の漢字について意味と音を解説するのみである。Appendix (付録)には、漢字や仮名や行書体を用いて『古事記』・『万葉集』・『竹取物語』といった歴史的文献の一部を紹介し、ローマ字による表記と英語の対訳を記載する。

• “the chief books consulted on the subject of the ideographs”

②Chalmers, John (1825–1899)/*An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms: after the Shwoh-Wan 100, A. D., and the phonetic Shwoh-Wan, 1833*, Trübner, Kelly & Walsh, John Avery, 1882

イギリス人宣教師で、英語—広東語の辞典などの著書があるチャルマーズによる漢字解説書。『説文解字』(“Shwoh-Wan”)と『康熙字典』の部首立てを検討し、漢字を300の基本形に分類し解説する。解説内容は漢字の英語による字義と中国語音だが、北京語や広東語による発音の区別を明記する場合もある。巻頭に300の基本形の一覧、巻末に康熙字典の部首立てに従った Index 形式の漢字表(2116字:実測)が存在する。全199ページ。本文内に出現する漢字は、作者自身がリトグラフで作成したという記述がある。なお、日本語に関連する内容は確認できない。

③Faber, Ernst (1839–1899)/*Prehistoric China*, “Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society” Vol. 26, No. 2, 1889–1890

ドイツ人宣教師で植物学者でもあったフェイバーによる論考。アジア協会中国支部の会報に掲載された。漢字の基本形や発音、中国語の起源について考察したもので、1889年12月に開かれた協会の第20回会合で議論を巻き起こしたとされる。

• “almost every character, and definitions and derivations”:

④Williams, Samuel Wells (1812–1884)/*A syllabic dictionary of the Chinese language: arranged according to the Wu-fang yuen yin, with the pronunciation of the*

characters as heard in Peking, Canton, Amoy, and Shanghai 『漢英韻府』, American Presbyterian Mission Press, 1874

ペリーの初来日に随行し通訳を務めたアメリカ人ウィリアムズによる漢英辞典。中国音のローマ字表記により検索する辞典で、字義・字源・熟語・異体字などを記載する。1,252 ページにわたって約 12,000 字を掲載する。チェンバレンが②・③以上に重視したもので、『文字のしるべ』のほぼ全ての漢字を収録し、定義や起源も頻繁に借用したとされる。Section 1 でもこの辞書の文字数について言及する。

- “also frequently been consulted with profit”:

⑤Lay, Arthur Hyde (1865–1934)/*Chinese characters for the use of students of the Japanese language*, Shueisha, 1895

下関や仁川の英国領事を歴任したレイによる漢英辞典。3 版まで。『康熙字典』の部首順に漢字を配列し、音訓と英語による字義を解説する。一部で異体字や熟語を併記する。初版は 147 ページで 3,899 の見出し語を扱う。Appendix には、「名乗」（日本人の人名）、「國名」、「府縣」などのローマ字と漢字の一覧がある。“Chinese-Japanese-English Dictionary” とされるが、漢字以外の中国語の情報（発音など）は見られない。

⑥Hepburn, James Curtis (1815–1911)/*A Japanese and English dictionary: with an English and Japanese index* 『和英語林集成』、Trübner, 1867

アメリカ人宣教師で医師でもあったヘボンによる日本初の和英辞典。3 版まで。初版は 558 ページ。見出し語である日本語語彙にローマ字とともにカタカナと漢字とを併記し、続いて英語で意味を示す。特に 3 版で見出し語に使用されたローマ字の表記法が、後にヘボン式ローマ字として広く知られるようになる。後半には和英の部を含み、松村 (1980) によると見出し語として和英 20,772 語、英和 10,030 語が存在する。

⑦Brinkley, Francis (1841–1912)/*An unabridged Japanese-English dictionary, with copious illustrations* 『和英大辞典』、Sanseidō, 1896

ブリנקリー、南条文雄、岩崎行親が編纂した和英辞典。動物学語は箕作佳吉、植物学語は松村任三がそれぞれ担任する。ブリנקリーはイギリスの軍人で、1870（明治 3）年に創刊された英字新聞 *The Japan Mail* を 1881（明治 14）年に買収し、その主筆を務めた人物。ヘボン『和英語林集成』の形式を踏襲し、日本語の見出し語をローマ字・カタカナ・漢字で表記し英語訳を加える。ページ数は 1,687 ページ、『和英語林集成』の 3 倍の内容をもつ。書名にもあるとおり、動植物を中心に挿絵も見られる。Introduction では日本語の構造や発音、文字、文法などについて解説する。

- “a fair working knowledge of the spoken speech”:

⑧Chamberlain, Basil Hall (1850–1935)/*A Handbook of Colloquial Japanese*, Trübner, Hakubunsha, 1888

『文字のしるべ』以前に出版されたチェンバレンによる日本語の口語入門書。4 版まで。本編は前半の理論編 (“THEORETICAL PART”) と後半の実用編 (“PRACTICAL PART”) の 2 編に分かれる。理論編は主に品詞ごとに章立てを行い日本語の文法を

解説する。実用編は様々な事象についてローマ字による日本語例文と英訳とを対照するもので、留意事項を欄外に記載する。日本語語彙に対応する英単語を示す和英辞典的な語彙表がある。日本語はヘボン式ローマ字で表し、仮名や漢字による表記は存在しない。

• “Japanese assistant”:

⑨Y. Ōno (大野) (1868? -1902)

文献名ではなく、日本人秘書の名前。眼病であったチェンバレンのために朗読係と和文書作成とを担当した。愛知教育大学附属図書館編 (1992) によると、英語に堪能な人物であり、チェンバレンが英国留学中の杉浦藤四郎⁸に宛てた 1913 (大正 2) 年の書簡の中に、1902 (明治 35) 年に 34 歳の若さで急死した日本人秘書の「オーノ」への述懐が存在する。また、『文字のしるべ』再版の補筆部分には E. Nagahara への謝辞があり、大野の死後にその役割を受け継いだ永原栄一に対するものである⁹。

以上のように多数の文献への言及があるが、①⑥といった現在でも有名な文献がある一方、“too little known work” とされる②のようなものもある。分野としては、文法書 (①⑧)、中国語としての漢字に関する文献 (②③)、漢和・和英辞典 (④⑤⑥⑦) などバラエティ豊かだが、個々の漢字情報は主に④を根拠に、⑤⑥⑦を補助的に利用したとの言及がある。項目・見出しが 1 万を超えるものがあるが、②と⑤は約 2,000 字と約 4,000 字と比較的少ない。特に⑤ *Chinese Characters* は個々の漢字情報が簡潔にまとまった漢和辞典で、漢字数が『文字のしるべ』の収録合計数に近く、後述するが他にも類似点が見られた。

引用の後半部分である “The consideration” 以下に注目すると、「本書で日本語を学ぶ外国人は、上記の辞典をもっているはずなので、本書では漢字の定義についての解説を最小限に減らす」とあり、『文字のしるべ』はあくまでも入門書であり、より詳細な情報は他の専門的な文献から得ることが推奨されている。また、チェンバレン自身の著作である⑧に関して、『文字のしるべ』の使用者は「口語についての知識も当然習得しているものと考えている」とあるので、この段落が単なる謝辞ではなく、日本語の表記について学習する前にまず口語について知識を十分に獲得しておくのが望ましいという、チェンバレンが想定する『文字のしるべ』の使用条件・前提と、日本語の習得のためには音声言語から筆記言語へと段階を踏むべきだという主張が読み取れる。Section

8 杉浦藤四郎 (1883-1968) は 1905 (明治 38) 年にチェンバレンと出会い、海外への同行や、留学の援助を受け、蔵書を贈与されるなど、非常に重用された人物であった。

9 相原 (1973) は、チェンバレンの帝大教授時代の様子として、「読書は、目が極度に悪いため強度の近眼鏡を用いても一日二時間以上の読書は無理で朗読者の助けによって研究を行なった。朗読者には日本の若い学生が多く、本田増次郎や上田敏もその中の一人であった。」とし、日本人学生を朗読係としていたことが分かる。一方で、後年はフランス人であるボラル (Charles Bolard Talbere) を秘書として雇用し、チェンバレンの晩年までのつきあいとなる。著者の調査によると、ボラルはチェンバレンの 1910 年の最終来日の際にも同行し、箱根の富士屋ホテルにも宿泊したことが判明している。

ごとに内容が高度化する『文字のしるべ』の構成とあわせて考えると、チェンバレンは段階的かつ発展的な学習を重視したことが分かる。

3. Lay と *Chinese Characters*

3.1. レイの経歴

前節で触れた『文字のしるべ』の参考資料⑤ *Chinese Characters* の作者である “Mr. Lay” について調査すると、武内博編（1995）に漢字の著書をもつ “Lay, Arthur Hyde” の名を確認でき、Brother Anthony（2010）からは Royal Asiatic Society-Korea Branch (RASKB) の会長であったことが分かる。さらに *Chinese Characters* の各版の扉と Preface の署名の情報などを追加すると、レイの経歴は次のようになる。

レイ (Lay, Arthur Hyde, 1865-1934)¹⁰ は、中国の芝罘出身のイギリス人で、父は芝罘領事の Lay, William Hyde (1836-76、中国名李蔚海)。教育のためイギリスに帰り、ケルソー・ハイ・スクールを卒業。独学で日本語等を学び、1887 年見習通訳生として来日する。1895 年横浜で *Chinese Characters* 初版を刊行、1897 年東京で再版を刊行する（肩書はともに “H. B. M.’s consular service”）。1899 年日本語通訳官、1902 年仁川副領事、1907 年同領事、1909 年臨時のソウル領事を兼務し、同年 *Chinese Characters* の三版を刊行、1911 年 RASKB の再結成時に会長となるが、1912 年ハワイ・ホノルル領事就任にともない辞任する。翌 1913 年下関領事として再来日、同年 RASKB の会報に *Marriage Customs of Korea* を掲載、1916 年会長に再任し、1914-1927 年朝鮮総領事を務める。



主に当時の東アジア地域において外交分野で活躍した人物であり、その関係者を調べると叔父の Lay, Horatio Nelson (1832-1898) やその父 Lay, George Tradescant (1800-1845) など中国の外交関係者の親類が多数いることが確認できる。レイが日本語に興味を持った直接のきっかけは不明だが、中国生まれという境遇と外交官として得た日本での知識と経験とが漢字学習書の執筆につながったと見られる。

3.2. *Chinese Characters* の所在情報

次に、レイの著書 *Chinese Characters* について検証する。管見の限り同書に関する先行研究は見当たらなかった。

同書の現存数は同時期のチェンバレンやアストンの著作と比較すると少なく、日本全国の大学図書館の蔵書検索ができる CiNii Books でも京都大学や国際交流基金などに再

10 肖像は、Anthony のサイト (<http://hompi.sogang.ac.kr/anthony/RASKBHistory1940.html>) より引用。

版4冊・三版6冊が検出されるのみであった¹¹。しかし、CiNii Booksでは提携先が所蔵していても検出されない蔵書があることが判明したため、日本全国の全大学図書館と主要な国立・公立図書館のサイトにおいて、個別に検索を行った。その結果、初版4冊を含めた13冊の所蔵データを新たに発見した。日本国内におけるこれら23冊の所蔵先と稿者による閲覧調査の状況を一覧する（下線は未見）¹²。

・初版	神戸女学院大学、津田塾大学、 <u>活水女子大学</u> 、 <u>関西学院聖和短期大学</u>
・再版	東京女子大学、東北学院大学（3冊）、国立国会図書館、 <u>国際交流基金</u> 、 <u>天理大学</u> 、 <u>京都大学</u> 、 <u>国際日本文化研究センター</u> 、 <u>大阪府立中央図書館</u>
・三版	青山学院（2冊）、国際基督教大学、同志社大学、筑波大学、国立国会図書館、 <u>国際交流基金</u> 、 <u>京都大学</u> 、 <u>麗澤大学</u>

国外では、アメリカのイエール大学、カリフォルニア大学、ニューヨーク公共図書館などに初版の所蔵を確認できる。イエール大学本を取り寄せて内容を確認したところ、見返しに人名と“Yokohama June 2/97”と読めるサインがあり、日本から持ち出されたものと考えられる。イエール大学本以外にも、稿者は海外の古書通販サイトから初版と再版を1冊ずつ購入し調査したため、合計16冊の現存本を実見したことになる。これらの調査を元に *Chinese Characters* の特徴について述べる。

3.3. *Chinese Characters* の特徴

本書は1冊本で、判型は約縦220mm×横150mm、版による相違はあるが全体で150～170ページ程度である。本文は英語で書かれており、日本語のローマ字表記はほぼヘボン式だが、拗音をKIŌ、RIŪなどとする。扉の書名は *Chinese Characters for the Use of Students of Japanese language*（表紙は *Chinese Characters, for the Use of Students of Japanese*）、3版まで出版された。稿者の調査によると、現存本の多くに書き込みが見られた。

本書の主要な構成は、扉、Preface（序文）、Radicals（部首）、漢字表、Appendix（付録）であり、漢字表部分が全体の8割以上を占める。

Prefaceは執筆の経緯や使用方法などを示した短い文章で、辞典の情報以外の記述はここにしか存在しない。版によって大幅な異同が見られるため、次節で検討を行う。

Radicalsは部首の一覧であり、『康熙字典』に基づく214部首が部首番号とともに紹介される。再版以降では、漢字表で各部首を扱うページ数とAppendixのページ数が追加され、目次としての機能が与えられる。

漢字表はPrefaceで“a list of the Chinese characters”（初版）、“a selected list of about

11 CiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books/>) で2014年8月10日検索。また、外国人の著作の検出数の例は次のとおり。チェンバレン『文字のしるべ』2版まで計38件、*A Handbook of Colloquial Japanese* 4版まで計87件、アストン *A Grammar of the Japanese Written Language* 3版まで計38件。

12 国会図書館本は、再版をマイクロフィッシュ、三版をデジタル資料として閲覧。

4,000 of the Chinese Characters”（再版・三版）と表現され、ページ数の多さから同書の本編とも言える。約 4,000 字の漢字を 214 の部首画数に従い 1 ページあたり 6 行 5 列のマス目の一つずつ示して、ローマ字による日本語の音訓と英語による字義を示す。

三版の漢字表の最初のページを図 2 に示す。ここでは、部首番号 1 「一」から 3 「丶」までに含まれる 26 の漢字が掲載されており、例えば、1 行目中央の「七」には、“SHICHI”という音と、“*Nanatsu*”という訓があり、英語では“Seven”に当たることが示されている。音読みは全て大文字、訓読みは斜体で示すという表記の原則が確認できる。2 行目右端の「丑」を見ると、“The ox, (the 2nd of the twelve horary characters), from 2 till 4 o'clock a.m.”と、文章による意味の補足がある。この他、熟語や異体字の記載も存在し、漢英辞典の一種と見なすことができる。

図 2 では部首ごとに行替えをするが、これは再版と三版に見られるもので、初版では部首に関係なく全ての漢字を隙間なく列挙する。

「丁」や「丈」の左上に「1」・「2」と部首内画数を明記しており、それぞれの文字の左の縦線が他よりも太く、画数の違いが明確に分かるようになっている。ページの欄外には、右側に「一」・「丨」・「丶」と部首、左側に“*No. of strokes.*”（画数）と部首内画数を示す。ページ欄外の部首は初版から表示されているが、それ以外は全て三版から導入された改良点である。初版・再版では部首はページの外側の欄外に表示し、左側に来る偶数のページでは部首も左に、右側に来る奇数のページの場合では右になる。しかし、上記の改良にともない、三版ではページの奇数偶数に関係なく、全てのページの左側に部首内画数、右側に部首を示すように変化する。

Appendix は日本人名（下の名前）や地名などをローマ字、英語、あるいは両方で表記し、対応する漢字を一覧したものである。各項目の内容は次のとおりである¹³。

表 1 *Chinese Characters* の Appendix

<i>Nanori</i>	名乗	日本人の名 例：Akiie 顯家、Hirobumi 博文
Provinces of Japan	國名	日本の五畿七道と旧国名 例：Tōkaidō 東海道、Iga 伊賀
<i>FU AND KEN</i>	府縣	明治時代の日本の府県名 例：Tōkiō Fu 東京府、Miyagi Ken 宮城縣
Government Offices	官衙	明治時代の日本の官庁 例：Cabinet, (Naikaku) 内閣、 Department of Education, (Mom-bu-shō) 文部省
Names of Countries, ETC	國名	海外の国名・地名 例：Asia 亞細亞、Pacific Ocean, (Taiheiyō) 太平洋

13 初版では内容は同じだが“Names of Countries, ETC”という見出しが存在しない。また、「國名」が 2 度出現するのは本文ママ。

No. of strokes.	1	一 (The 1st Radical). ITSU, ICHI. Iitotsu, kazu. One.	1 丁 TEI, CHŌ. Iinoto, wakōdo, yoboro. The fourth calendar sign, an adult, servant, a measure of length, $\frac{1}{36}$ of a ri.	七 SHICHI. Nanatsu. Seven.	2 丈 JŌ. Take. Ten shaku (about 10 English feet), measure, stature, quantity, an elder, Mr.	三 SAN. Mitsu. Three.
	3	上 JŌ. Ue, kami, noboru, agaru. Above, high, superior, first, to ascend, send up.	下 GE, KA. Shita, shimo, kudaru, sagaru. Below, inferior, lowest, to descend, send down.	3 不 FU, FU. Zu, ina. Not, a negative verbal suffix.	丐 KAI, KATSU. Kou, atau. To beg, bestow, a beggar.	丑 CHŪ. Ushi. The ox, (the 2nd of the twelve horary characters), from 2 till 4 o'clock a. m.
4	4 且 SHIO, SHIA. Shibaraku, mata, katsu, karisome. For a short time, again, moreover, supposing that.	丕 HI. Ōi naru. Large, great.	世 SE, SEI. Yo. The world, age, times, generation.	丘 KIŪ. Oka. A mound, Confucius.	丙 HEI. Iinoe. The third of the ten calendar signs, third, C.	
7	丞 JŌ. Tasukeru, tsugu, ukeru. To assist, connect, receive, an old man (used in plays), an assistant official of high rank.	7 並 HEI. Narabu, narabi, awaseru. To be arranged in a row, together with, to unite.				
3	丨 (The 2nd Radical). KON. Tate, susumu, shirizoku. A connecting line perpendicularly, to pass through.	3 中 CHŪ. Naka, nakaba, uchi, ataru. The inside, centre, within, to hit, correspond with.	6 串 KWAN. Tsuranuku, kushi. To string together, a skewer.			
2	丶 (The 3rd Radical). CHŪ. Shirushi. A mark, point.	2 丸 GWAN. Marui, maru. Round, a circle, a pill, used in the names of ships, etc.	3 丹 TAN. Akai. Red, a pill, bullet, or anything round.	4 主 SHU. Aruji, tsukasa, tsukasadoru, omonaru. A lord, ruler, to rule, principal.		

图 2 Chinese Characters (三版 p. 9)

Appendix に続き、再版では 30 箇所程度の修正の指示がある Errata（正誤表）、三版では日本語による縦書きの奥付がそれぞれ存在する。奥付の内容は次のとおりである。

発行所 ケリー、エンド、ウォルシュ株式会社
 印刷所 凸版印刷株式会社分工場
 東京市本所區番場町四番地
 印刷者 垣内伊太郎
 東京市本所區番場町四番地
 発行者 ケリー、エンド、ウォルシュ株式会社
 横濱市本町六十番地
 著作者 アーサー、ハイド、レー
 明治四十二年十二月廿五日發行
 明治四十二年十二月廿一日印刷

英字の文献だと、扉に発行者などの情報を載せるので本来奥付は必要ないが、明治以降の日本関連の書籍では日本語の奥付もあわせもつ場合がある。三版で追加されたことから、日本の出版文化への配慮が加わったとも思われる。

続いて、各版の扉の発行年と発行者情報、本書の最終ページの番号、収録する見出し語の集計をまとめると次のようになる。全ての版の発行者が異なるのが特徴的である。

初版	1895 年	149 ページ	3,899 語	SHUEISHA, TŌKIŌ.
再版	1897 年	165 ページ	3,868 語	Printed by The Ekisei-kwan. TOKIO:
三版	1909 年	167 ページ	3,879 語	Kelly & Walsh, Limited. Yokohama, Shanghai, Singapor, Hongkong.

再版では漢字数は減少するが、ページ自体は増える。これは漢字表のレイアウト変更が原因で、初版は全ての漢字を隙間なく列挙していたものを再版以降では部首ごとに行替えを行うように変更したため、空白が多くなりページ数の増加につながる。この他、Radicals のページ数や漢字表欄外への画数の追記といった利便性の向上が確認できる。

漢字表部分に関して詳しく見ると、図 3 のように見出しそのものが熟語になっているもの（「袈裟」）や、左下に熟語（「一蜓」）、異体字（「国」）を示す用例が確認できる。

熟語見出しは、初版では「袈裟」「轆轤」「鳳凰」「鸚鵡」の 4 語、再版と三版では「袈裟」「轆轤」の 2 語である。前の 2 語は全ての版で共通するが、後の 2 語は版によって次のように扱いが変化する。



図3 熟語と異体字 (三版)

表2 変化が見られる熟語

	初版	再版	第3版
鳳凰	<ul style="list-style-type: none"> 部首 16 「几」に「鳳」 部首 196 「鳥」に「鳳凰」 	<ul style="list-style-type: none"> 部首 16 「几」に「鳳」 部首 196 「鳥」に「鳳」 (熟語として「一鳳」) 	<ul style="list-style-type: none"> 再版と同じ
鸚鵡	<ul style="list-style-type: none"> 部首 196 「鳥」に「鸚鵡」 	<ul style="list-style-type: none"> 部首 196 「鳥」に「鸚」 (熟語として「一鸚」) 	<ul style="list-style-type: none"> 部首 196 「鳥」に「鸚」 (熟語として「一鸚」)

見出しとしては、初版では2箇所重複する「鳳」が1箇所のみ掲出になり、「鳳」の位置に「鳳凰」という熟語を併記するようになる。「鸚」は、再版では熟語見出しではなくなり、三版ではより一般的な字体である「鸚」に変更される。これらについては、単なる不注意だけが原因ではなく、全体的に著者の理解が不足していた部分だと推測される。

熟語も含め、見出し語数・漢字数を計測すると表3のようになる。

表3 Chinese Characters 各版の文字数

	見出し語	異体字	熟語
初版	3,899 語 (4 熟語)	137 語	51 語
再版	3,868 語 (2 熟語)	65 語	32 語
三版	3,879 語 (2 熟語)	59 語	31 語

初版から再版にかけての異体字と熟語の減少、再版から三版への見出し語の増加がある。2箇所重複して出現する用例や、異体字・熟語として出現する見出し語もあるため、正確な文字数の計算は難しいが、どの版でもおおそレイが主張する4,000という文字数に近いものになっている。また、見出しの字体に関しては、使用した活字の違いなのか、意図的な変更なのかは不明だが、版によって異なるケースが確認される。

3.4. Preface の異同

Chinese Characters における改訂による最も大きな異同は、Preface に見られる。先述のとおり Preface は同書にあるほぼ唯一の作者による文章であるが、その内容が初版と

再版で大きく異なる。少し長くなるが、稿者による初版の Preface の翻訳を掲載する。

序文

本書の目的は、日本語を学習する学生に、学習上必要となる漢字の一覧を提供することです。厳選した 4,000 近い漢字を掲載しているので、どんな目的にも十分でしょう。

3~4 年前に「報知新聞」の付録として三千の漢字が掲載されました。これは、特別な機会を除き、新聞紙上ではこの漢字のみに制限しようとするものです。これをそのまま英語に翻訳し出版する許可をもらったのですが、全体的に手を加えた別の一覧表として用意するのが賢明に思えました。しかし、本書は「報知新聞」の記事に出現する漢字の大部分を含んでいます。

学習者の役に立つように、代表的な日本人の名前（「名乗」）を用意しました。

日本の「國名」と「府縣」や、外国の一般的な地名も追加します。

横浜の W. J. S. シャンド氏、東京英国公使館の H. G. パーレット氏、およびカシワギ シゲフサ氏に感謝を申し上げます。

アーサー ハイド レイ

横浜 1895 年 2 月

重要な点としては、「報知新聞」の付録である「三千字字引」（1887）と関連のある漢字表をもつこと、目的によらず日本語学習者にとって必要十分な 4,000 の漢字を掲載したこと、の 2 点があげられる。謝辞にある人物は、*Japanese self-taught* (1907) という著書のあるシャンド¹⁴と、イギリス人外交官で 1902（明治 35）年の日光中禅寺湖への鱒の放流を行ったパーレットと見られる。「カシワギ シゲフサ」に関しては現在のところ分かっていない。

続いて再版の Preface を見る。

再版序文

初版を慎重に改訂しました。

本書では、日本語を勉強する際に最も役立つ約 4,000 の漢字の一覧表を学習者に提供することを狙いとしました。ここで紹介した文字を習得すれば、日本の報道に関するコラムを容易に読めるようになるでしょう。

以下に示す本書の利用方法は、多くの人々によって有効だと証明されたと言われています。この方法を採用した学習者は、2 年でこの文献の漢字を問題なく読み書きでき、意味も理解できるようになるでしょう。

まずは最初の文字から始めましょう。日本のペンを使用して写してください。そして、何度か書いた後に、紙で漢字を隠して、音と英語と日本語の意味だけを見て思い出して書き直してください。次に、二つ目以降の漢字も同様に記憶し、後日また最初に戻ってください。最初のページを覚えきるまで全ての文字を繰り返し続け

14 原文は“Shard”と印字されるが、今回調査した数種の現存本では“Shand”と修正があった。

てください。その次に順序を逆にして、文字だけを見て、意味と日本語の音を覚えるように何度も繰り返し努力してください。次の日は、同様の方法で2ページ目を暗記し、その後最初のページに戻って今回は指で文字を書くだけです。10ページ目を学習するまで同じことを毎日続け、それ以降は1日1ページずつ進んでください。この本の学習が終わるまでは、全てのページを最低でも週に1回は復習してください。

もちろん、漢字の実際の使い方を知るために、単行本や新聞などの本も読む必要があります。今回の改訂では東京のR. J. キルビー氏に大変お世話になったことをお礼申しあげます。

アーサー ハイド レイ

英国公使館 東京 1897年11月

謝辞にあるキルビーはチリの駐東京領事であった人物である。

上記から明らかのように、初版にあった漢字表の作成に「三千字字引」を用いたという記述が再版では見られない。代わって漢字学習のための具体的な方法の記載がある。

三版のPrefaceは再版とはほぼ同様だが、冒頭の1文に続き、利便性を考えて画数を追記した旨の追記と、レイの肩書きがソウル英国総領事へと変更される。

3種の版の記述を比べると、やはり再版で「報知新聞」と「三千字字引」への言及が削除され、同書の具体的な利用方法の追加が行われた点が特徴的である。この大幅な記述の変更理由は不明ながら、初版における漢字文献の関係性の示唆は重要であろう。次章では、他文献との比較から論を進めたい。

4. 基本漢字文献の比較

4.1. 『文字のしるべ』と *Chinese Characters*

この二つの文献の書誌情報・特徴などを比較すると次のようになる。

表4 *Chinese Characters* と『文字のしるべ』の書誌の比較

		出版年	ページ数	字数	判型 (概算)	配列
CC	初版	1895	149	3899 語	縦 220mm × 横 150mm	部首画数
	再版	1897	165	3868 語		
	三版	1909	167	3879 語		
文字	初版	1899	482	No. 2350 まで (+ 1961)	縦 305mm × 横 230mm	実用度
	再版	1905	547	No. 2490 まで (+ 2040)		

『文字のしるべ』の方が *Chinese Characters* よりも大型でページ数も多く、本文でも単なる字典的な漢字の解説以外の記述が多く見られる。一方、*Chinese Characters* の本

体にあたる漢字表は、音訓と英語訳、熟語、異体字を示すが、日本語例文は存在しない。

出版年の順序は、*Chinese Characters* 初版→再版→『文字のしるべ』初版→『文字のしるべ』再版→*Chinese Characters* 三版となる。先発は *Chinese Characters* であり、『文字のしるべ』がその存在に言及する以上、影響関係は明らかである。

その影響を確認するため、両者の初版同士の漢字を比較する。『文字のしるべ』初版では、本文で解説する基本漢字が 2350 字、巻末に活字を列挙するだけの追加漢字が 1961 字とされるが、重複や誤りを考慮すると、基本漢字 2345 字・追加漢字 1942 字の計 4287 字と見なすことができる¹⁵。*Chinese Characters* の初版は見出し 3899 語だが、「袈裟・輓轡・鳳凰・鸚鵡」の 4 語が熟語として立項し、32 字が重複するので、最終的には 3871 字となる。また、異体字は 137 項目に対し 138 字存在する。*Chinese Characters* の漢字が『文字のしるべ』のどの区分に存在するか、見出し字と異体字とに分けて比較すると表 5 となる¹⁶。

表 5 *Chinese Characters* と『文字のしるべ』の漢字比較（ともに初版）

<i>Chinese Characters</i>	『文字のしるべ』		『文字』になし
	基本漢字 2345	追加漢字 1942	
見出し 3871	見出し 2195	見出し 1134	517
	異体 25	異体 0	
異体 138	見出し 36	見出し 22	69
	異体 10	異体 1	
CC になし	114	787	

この表により、*Chinese Characters* の見出し字 3871 字中 3354 字 (86.6%) が『文字のしるべ』と共通することが分かる。一方、『文字のしるべ』にない 517 字には、比較的難度の高い漢字と、通常は構成要素としてのみ使用する部首（丶丨冂など）が多数含まれる。

『文字のしるべ』から見ると、No. があり見出し字となる「基本漢字」2345 字のうち、2231 字 (95.1%) が *Chinese Characters* と共通する。「基本漢字」にない 114 字にはやや複雑な漢字もあるが、むしろ略字体（医円旧区学など）が目立った。『文字のしるべ』の初版は、異体関係にある字体でも別 No. でともに立項する場合があるので、両文献に存在しても、*Chinese Characters* では見出しと異体字、『文字のしるべ』ではともに見

15 この数字は見出し語数であり、重複を除外し異体字を含めた初版の基本漢字の総字体数は 2423 字体となる。

16 岡墻 (2008) に示すように、文献ごとに字体・字種の捉え方が異なり、重複する漢字があるため、複数の漢字集合を比較する際には字種・字体を整理した理想的な母集合を基準とすることが望ましい。しかし、整理後の漢字数が見出し字数と乖離してしまう等の問題もあるため、本稿では字種ではなく、各文献における見出し字の字体について、他方の文献での有無を計測した。

出しというように区分が異なる場合、見出し字同士の比較では共通しないことになってしまう字体がある。このような字体の存在は、両文献における正字として認識する字体や概念に相違があることの表れであると言える。

文献の書誌に関しては、『文字のしるべ』両版と *Chinese Characters* 三版の発行に Kelly & Walsh が関与する点、『文字のしるべ』の印刷所である秀英舎が *Chinese Characters* 初版の発行者である点が共通する。その他には、音読みは1文字目を大きくした上で全てを大文字で示し、訓読みはイタリック体で示すという表記のルールや、罫線のある正方形に近いマスの中に個々の漢字を配列する『文字のしるべ』の筆写字体が *Chinese Characters* の漢字掲出と類似することなどが、共通点として指摘できる。どちらも先行する他の漢字文献ではあまり一般的に確認されるものではないようなので、両書に限定的な特徴なのか今後調査を行いたい。

以上のように、ともに外国人のための漢字学習書でありながら、形態・内容に相違が見られた。これは両書の目的意識と期待する学習方法・使用方法の相違に基づくと推測できる。チェンバレンは成人後に来日し、もともとローマ字論者として漢字を排除しようとした過去があり、漢字は日本語習得上の障害と考え、それを克服するためのより効率的かつ実践的な入門書の作成を目指した。そのために、実用度に沿った配列を行い、略字体を多く掲出するといった工夫を加えた。Preface からは、『文字のしるべ』はあくまでも入門書であり、*A Handbook of Colloquial Japanese* による口語知識が前提となる点や、他の文献から不足する解説を補うという使用方法が読み取れる。一方レイは、文脈や実例を用いずに漢字単体での暗記を薦めるが、この手法は現代の日本におけるドリルを用いた書き取り練習による漢字教育を連想させる。中国で生まれ育ったレイにとって漢字は身近な存在であり、反復練習による習得が直感的であったのだろう。また、部首字の収録や正字にこだわった掲出などは、漢字文化圏出身者がもつ規範意識の表れとも取れる。つまり、『文字のしるべ』が実用を旨とした入門書であったのに対し、*Chinese Characters* は漢字の練習帳であるとともに簡易さと規範性を備えた辞典としての機能をも重視したのである。このように、二人の日本語研究者の立場や来歴の違いを感じ取ることができる。

4.2. 「三千字字引」との比較

Chinese Characters 初版のPrefaceで言及される「三千字字引」について検討する。「三千字字引」は、「郵便報知新聞」明治20(1887)年11月27日付第4447号の付録で、紙面を8分割して組み立てる冊子である。全32ページだが、本体に当たる字引部分は凡例1ページ・本体22ページであり、残りのページにはその他の記事を掲載する。

通常「三千字字引」は、当時「郵便報知新聞」の主筆であった矢野文雄(龍溪)による新聞紙上の漢字制限を目指して作成・公表されたが、実際にはほとんど効力をもたなかったと伝えられる。この字引に関する専門的な先行研究としては、現存する2部を確認した上での報告である池田・高田(2003)があり、組み立て後は縦17cm×横12cmのサイズになること、複製本には収録されない字引以外の部分があること、複製本では字体・音訓について補正が加えられていることなどを指摘するとともに、新聞記事の買い取りに関する雑報が含まれることから、「新聞読者にも漢字制限を及ぼそうとする遠

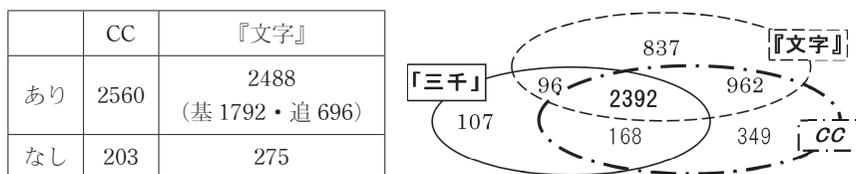
字（働詞、形容詞、副詞、前置詞、感嘆詞、接續詞）」を、訓のいろは順に従って配列する。訓読みがない場合は音に従う。多くは音訓のみを記すが、熟語・義注を併記する例もある。異体字に関する情報はない。「(論)ズ」など、丸括弧でくくられた漢字は複数箇所重複出現することを意味すると思われるが、徹底はされていない。

凡例には4項目が立てられており、字体・音・訓に関する解説の後に、「此表ハ極メテ其功ヲ急キ數日ニシテ稿ヲ脱セシカ故ニ固ヨリ漏誤アルヲ免レス因テ實用ノ後隨テ改メ隨テ訂シテ完全ニ至ラシメンヲ期ス」とある。もともと修正を意図した暫定的な内容であったことになるが、改訂版の発行は確認されていない。

「三千字字引」は、独立した刊行物ではないため所蔵先の検索が困難で、現存数も少ないと見られる。吉田・井之口編（1962）に複製が掲載されるが、「郵便報知新聞」の複製版やマイクロフィルム版にはこの字引は収録されない。新聞の一部であるため、現存していても劣化が進んでおり、稿者が調査した国会図書館所蔵本では、破損や欠落のために字体の判別や文字そのものの確認が困難な部分が多くあった。

「三千字字引」は訓引きの字書としての便宜のために、同じ漢字を複数の和訓に重出するという特徴がある。字引の末尾には、重複を除き実字 1000 字、虚字 2000 字の計 3000 字になるとの記載があるが、実測では延べ 3252 字、異なり 2763 字であった。この 2763 字を「三千字字引」の収録漢字数として捉え、『文字のしるべ』と *Chinese Characters* の漢字と比較する。「三千字字引」が最も古く、字数も最小の集合であるので、これを元に他文献の初版での漢字の有無をまとめると表 6 のようになる。

表 6 「三千字字引」と *Chinese Characters*・『文字のしるべ』の比較



「三千字字引」2763 字中、*Chinese Characters* は 2560 字 (92.7%)、『文字のしるべ』は 2488 字 (90.0%) を含んでおり、3 文献全体としては 2392 字 (86.6%) が共通する。*Chinese Characters* は『文字のしるべ』よりも全体の文字数が少ないながらも「三千字字引」との共通数が多いため、より「三千字字引」との結びつきが強いと言える。一方で、「三千字字引」と『文字のしるべ』だけに共通する 96 字や、*Chinese Characters* と『文字のしるべ』だけに共通する 962 字も存在し、*Chinese Characters* は「三千字字引」を元にはしてはいるが、多数の加除があることが確認できる。

個別の共通点を確認すると、例えば、「裏」という本来は音「カ」である漢字が、「三千字字引」では訓「ツ・ム」・音「リ」、*Chinese Characters* では「RI/Ura, uchi」として「裏」と混同して掲出されており、前者の錯誤を後者が踏襲してしまった形跡であると見られる。また、両文献では「瑠璃、芙蓉、蝙蝠」といった 8 種類の熟語が共通しており、それぞれに記載される熟語は *Chinese Characters* 51 語、「三千字字引」21 語であるため、後者から見ると 4 割近くが共通することになる。

ここで、岡墻（2008）で使用した各種の漢字集合の情報を有する字種データベースを用いて、今回の比較結果を検証する。*Chinese Characters* と字数・年代に近い川田鐵彌・佐藤乾三編「漢字用例」（1901年、3701字）について、「三千字字引」を基準に共通する漢字を調べたところ、2763字中2367字（85.7%）が検出される。これは上の2文献と共通する割合である92.7%・90.0%よりも明らかに少ない。一方、今回の3文献には共通する漢字のうち、「寐芬堅撿」など73字体が、他の基本漢字集合には存在しておらず、特に「撿」は他集合では全て異体字「檢」のみを収録することが分かった¹⁸。このような点は、今回検討した3種の漢字集合がその他の集合とは別の系統に属する証拠と言えるだろう。

5. 漢字集合の系譜

前章により、「三千字字引」—*Chinese Characters*—『文字のしるべ』という関係性の連なりに言及した。ここではさらに視野を広げて、より長い漢字文献の通時的なつながり、つまり漢字集合の系譜ともいえるべき関連性に言及したい。

岡墻（2008）では、吉田・井之口（1962）、宮島他（1982）、小林（1988）などの情報を参照し、実物の調査とあわせて漢字集合資料を整理した。その結果、基本漢字集合の多くは明治以降に出現することが明らかとなった。

現代の漢字集合を見ると、日常の漢字使用の目安である「常用漢字表」、情報処理用の符号化漢字集合である「JIS漢字」などが代表と言えるが、JIS漢字の起源については、池田（2001）が詳しい。同論文では、JIS漢字第1次規格であるJIS C 6226は、その原典の一つとして情報処理学会漢字コード委員会「標準コード用漢字表（試案）」（1971）が使用されたことを紹介し、この試案が作成された際の13の参考資料を示した上で、その中でも中心的な役割を果たしたとされる「日下部表」を検討する。池田（2001）より、「標準コード用漢字表（試案）」の参考資料を一覧する。

1—「標準コード用漢字表（試案）」の参考資料

- (a) 日下部重太郎「現代国語思潮統編」（昭和8）附録表
- (b) 大西雅雄「日本基本漢字」（昭和16）
- (c) 新村出「広辞苑」第2版付録「通用漢字一覧」（昭和44）
- (d) 朝日新聞社「統一基準漢字書体表」（昭和32）
- (e) 全日本漢字配列協議会「常用漢字目録」（昭和43）
- (f) 日本活字鑄造株式会社「標準活字目録」
- (g) 国会図書館用NDL70用コード表（昭和45）
- (h) 共同通信社「漢テレハンドブック」
- (i) 日経FAM・Mタイプ文字表

18 字種DBで用いたその他の基本漢字集合は次のとおり、1900（明治33）小学校令施行規則「第三號表」1,200字、1931（昭和6）臨時国語調査会議決「常用漢字表」1,858字、1942（昭和17.6）国語審議会答申「標準漢字表」2,528字、1946（昭和21）国語審議会答申「当用漢字表」1,850字、大西雅雄（1941）『日本基本漢字』3000字。

- (j) 講談社国語辞典付録「漢字音訓総覧」(昭和44)
- (k) 野村広氏「4万5千の性氏に使われている文字の調査」(昭和44)
- (l) 国県群市町村大字名および中学校名に用いられた漢字
- (m) 国語研両調査に共通に現れた表外字

1-(a) は通称「日下部表」と呼ばれる資料で、この表の例言で「この表は、使用の事実によつて調べ出した現代日本の実用漢字五千六百七十五字と別体漢字八百三字とを序列し、その中において、文部省臨時国語調査会選定の「常用漢字」がいかなる位置を占めるかを示す」と作成の目的を述べ、漢字を選定する際に使用した参考資料11種を提示する。さらに、「比較複合によつて得た実用漢字を審査するために」、『康熙字典』・『玉篇大全』・『大字典』・『詳解漢和字典』などの字書類も参照したとの記述があり、慎重な字種の選定基準があったことが伺える。

さらに池田(2001)でこれらの参考資料について文字数を含めた検討があるので紹介する。

2-「日下部表」の参考資料

- (a) 明治初年来の官撰並に民撰の重な小学読本の漢字
- (b) 郵便報知新聞社「三千字字引」【1887(明治20)、3,000字】
- (c) 重野安繹「常用漢字文」【1899(明治32)、5,610字】
- (d) チェンバレン『文字のしるべ』【1905(明治38)、4,311字】
- (e) 陸軍教授編纂の「漢字用例」【1901(明治34)、3,688字】
- (f) 仁科衛「減字私考」【1903(明治36)、4,644字】
- (g) 安達常正『漢字の研究』【1909(明治42)、4,688字】
- (h) 後藤朝太郎『教育上より見たる明治の漢字』【1912(明治45)、約6,000字】
- (i) 帝国議会速記録の漢字調べ【1910(明治43)年、4,052字】
- (j) 「邦文タイプライター」の漢字【1915(大正4)2,863字】
- (k) 東京の大活版所と大新聞社の字母表及び利字表、など

ここで注目すべきは、2-(b)「三千字字引」、(c)『文字のしるべ』、(e)「漢字用例」である。日下部は『現代の国語』(1913)で、「Chamberlain氏は「文字のしるべ」に日本の実用漢字を選び、之をおぼえてしまへば學者といふべきものとして四千三百十一字をあげ、そのうち普通用は二千三百五十九字とされた。(中略)漢字節減の最高度は、まづ三千字位のものであらう¹⁹⁾と述べる。また、日下部(1933)でも、「実用漢字の能率の等級を示すためには、比較複合点の多少、「文字のしるべ」や「邦文タイプライター」や大活版所・大新聞社の利字表などの等級を参酌し、以上の諸攻究を統合して、「現代国語精説」の「國民実用の漢字」(四〇一—四一二頁)に詳述した標準によつて各漢字

19「普通用は二千三百五十九」は、チェンバレンによる『文字のしるべ』の「基本漢字」の提示数である初版2,350字、再版2,490字のどちらとも一致しないが、「四千三百十一字」という総数は、チェンバレンが初版で提示する「基本漢字」2,350字と「追加漢字」1,961字の合計4,311字と等しい。

を一等字から四等字までに分けた」と述べる。このように、漢字の字数と実用度の等級という2点に注目すると、日下部は『文字のしるべ』を単なる一つの参考資料としてではなく、ある種の基準とも捉えていたと考えることができる。

再び「標準コード用漢字表（試案）」の参考資料に視点を戻し、1-(b)『日本基本漢字』について述べる。同書は音声を中心とする言語学者大西雅夫が教科書や新聞などの80万字を調査し、当時の日本で使用される3,000字の基本漢字を選択し、「重要順位、又は実用価値を示す」順序に掲出するものである。大西は表の客観的価値を調査するために、10種の「対照用主観表」と比較対照を行っている。岡墻（2008）の調査を踏まえ、これらを一覧する。

3- 『日本基本漢字』の対照資料

- (a) 日下部氏「重要漢字」＝「日下部表」か？
- (b) 國語調査會査定常用漢字＝「常用漢字表」（1931年）
- (c) チェムバレン氏字典＝チェムバレン『文字のしるべ』（Kelly & Walsh, 1899年）
- (d) ローズ・イニス氏字典＝Rose-Innes, Arthur English-Japanese conversation dictionary（Kelly & Walsh, 1912年）
- (e) 安達氏「漢字ノ研究」＝安達常正編『漢字の研究』（六合館、1909年）
- (f) 國定讀本（舊小學讀本十二卷）
- (g) 圓道氏「草書字典」＝圓道祐之編『原字速解草書大字典』（大倉書店、1935年）
- (h) ケース貼（定期刊行物用）
- (i) ケース貼（一般印刷物用）
- (j) 毎日新聞「校正の研究」＝大阪毎日新聞社校正部編『校正の研究』（大阪：大阪毎日新聞社、東京：東京日日新聞社、1928年）

ここで注目すべきは、3-(a)日下部氏「重要漢字」と(c)「チェムバレン氏字典」であり、それぞれ「日下部表」と『文字のしるべ』だと推測される。続いて、2-(c)、3-(c)の『文字のしるべ』であるが、この文献の参考資料は2.3. で触れたとおり次のものである。

4- 『文字のしるべ』の参考資料

- (a) Aston, William George (1877) *A Grammar of the Japanese Written Language*, Lane Crawford,
- (b) Chalmers, John (1882) *An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms: after the Shwoh-Wan 100, A. D., and the phonetic Shwoh-Wan, 1833*, Trübner/Kelly & Walsh/John Avery,
- (c) Faber, Ernst (1889) *Prehistoric China*, Vol. XXIV, No. 2, of the "Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society"
- (d) Williams, Samuel Wells (1874) *A syllabic dictionary of the Chinese language: arranged according to the Wu-fang yuen yin, with the pronunciation of the characters as heard in Peking, Canton, Amoy, and Shanghai*, American Presbyterian Mission Press

- (e) Lay, Arthur Hyde (1895) *Chinese characters for the use of students of the Japanese language*, Shueisha,
- (f) Hepburn, James Curtis (1867) *A Japanese and English dictionary: with an English and Japanese index*, Trübner,
- (g) Brinkley, Francis (1896) *An unabridged Japanese-English dictionary, with copious illustrations*, Sanseidō,
- (h) Chamberlain, Basil Hall (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*, Trübner, Hakubunsha

先述のとおり、4—(e) レイ *Chinese Characters* は「三千字字引」との関係が示唆され、その「三千字字引」は「日下部表」の関係資料として2—(b)にも出現する。

同じく「日下部表」の関係資料である2—(e)「漢字用例」は、1906(明治39)年に「送假名法」と合冊で刊行された陸軍幼年学校用の漢字学習の教材である。「漢字用例」の本編は、訓に従って漢字を五十音順に配列し、同訓の漢字の字義の違いを解説する。熟語や使用例も併記されるが、使用例は主に訓点を付した漢文での掲出であり、中には「論語」、「禮記」、「孝經」のように出典を明記するものもある。本編の編纂にあたっては、『康熙字典』・『字彙』とともに、次に示す文献を主に参照したとの記述がある。

5—「漢字用例」の参考資料

- | | |
|----------------|----------------|
| (a) 伊藤東涯『操觚字訣』 | (e) 松本愚山『譯文須知』 |
| (b) 荻生徂徠『譯文筌蹄』 | (f) 宇野明霞『文語解』 |
| (c) 三宅橋園『助語審象』 | (g) 皆川淇園『虚字解』 |
| (d) 河北景楨『助字鶴』 | (h) 岡白駒『助辭譯通』 |

これらはいずれも近世から近代初期にかけて、日本人が作成した文献である。漢字は「虚字」・「実字」・「助字」といった分類を行うのが主流で、選択理由や配列基準が明確でないものもあるが、『助辭鶴』は「三千字字引」・「漢字用例」と同じく和訓の五十音順で漢字を配列する。本稿では個別には検討しないが、漢学や国学の流れを継ぐ要素が色濃いとと言える。「三千字字引」における「実字」「虚字」の分類、漢字の配列基準などの共通点を確認できる。

ここで視点を変えると、杉本(2008)にも指摘があるように、西洋人による日本語研究は室町末期のキリシタン宣教師たちに始まり、鎖国時代にはロシア人、オランダ人、開国後にはイギリス人外交官の活躍へとつながっていく。西洋人による日本語研究は、近代以降に突然起こったものではない。また、西洋人による中国語研究の成果とも言える英華・華英辞典の成立は、日本にも影響を与えた。『英華辞典』(1847-1848)の著者であるメドハースト²⁰が著した *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary* (1830) について、呉(1988)や宮田(2010)などは日本初の英和辞典で

20 Medhurst, Walter Henry (1796-1857) イギリス人宣教師。パタヴィア、上海などで布教活動を行うとともに漢字文献の研究を行った。

ある堀達之助『英和对訳袖珍辞書』(1862)への影響を、森岡(1991)は先述のヘボン『和英語林集成』(1867)への影響を指摘している。『文字のしるべ』の本文においても、上述の参考資料以外にもジャイルズ²¹の英華辞典などへの言及が確認できる。つまり、こちらの方面からの影響関係も確かに存在したということである。

以上をまとめると、次のことが言える。基本漢字集合はその出自によって、日本の伝統的な研究成果に基づくものと、外国人による漢字・日本語学習書という2種類に大別できる。前者は、「実字」・「虚字」といった概念をもつ「三千字字引」や「漢字用例」など、後者は西洋人の手によるレイ *Chinese Characters* やチェンバレン『文字のしるべ』などである。しかし、*Chinese Characters* が「三千字字引」を外国人向けに改良したものであり、国語国字問題の解決に力を注いだ日下部が「三千字字引」と『文字のしるべ』をともに参照することなどからも、両系統は相補的に利用され発展してきたことが分かる。また、そもそも「三千字字引」が新聞紙上における経済性・効率化を目指したものであるなら、基本漢字集合はその出自から漢字節減論と深く関わっており、西洋的な合理化の流れに即応するための機能をもっていたことが明白である。

本章の考察については今後精査を行い影響関係の立証が必要であるが、前章までの調

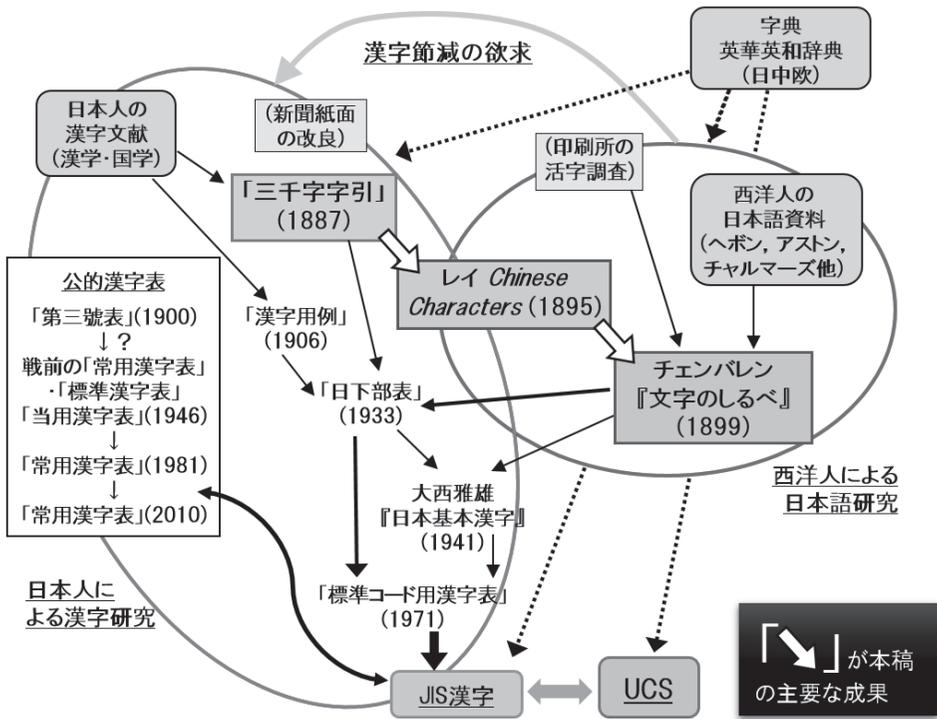


図5 漢字集合の系譜と影響関係

21 Giles, Herbert Allen (1845-1935). イギリス人外交官であり中国語研究者で、後にケンブリッジ大学の中国学教授。A *Chinese-English dictionary* (1892) で用いた漢字音のウェード=ジャイルズ式綴字法で知られる。

査結果と関連付けることで、図5のような漢字集合の変遷過程と影響関係が浮かび上がる。レイ *Chinese Characters* は、チェンバレン『文字のしるべ』に先立つ日本語学習のための基本漢字文献としての価値だけではなく、これまでは明らかにされなかった漢字集合の系譜の空隙を埋める重要な役割を担っていたことが分かる。

6. まとめ

以上、『文字のしるべ』、*Chinese Characters*、「三千字字引」の3種の漢字文献を中心に扱い、近代日本における基本漢字集合の変遷について検討した。*Chinese Characters* は従来言及されてこなかったが、後発の『文字のしるべ』とともに、日本人と西洋人が作った異なる目的と価値観をもった文献同士をつなぐ役割を果たしたことが明らかになった。ここに漢字集合の系譜とも呼べる大きな流れを見出すことができ、「三千字字引」は従来の漢字制限上の失敗という評価ではなく、基本漢字集合の成立と発展という観点からの再解釈が必要であるように感じる。このように見ると、基本漢字文献の成立と発展には西洋人が深く関与しており、漢字という伝統的分野にも西洋的合理化が及んでいたと言えるが、和製の集合は一方的に淘汰されたのではなく、異なる出自の集合同士が合流し、ともに発展していったという動態を観察することができた。

本文での言及がある以上影響の有無は論ずるまでもないが、他集合との比較によって、上記の3集合に共通する漢字数の多さが証明された。また、共通の特徴がある一方で、配列順や掲出上の工夫などに相違が見られ、文献それぞれが独自の目的に沿った構成と内容をもっていたことが分かる。今回は検討できなかった3集合間での和訓の比較や、他の参考資料との関係性への言及は今後の課題としたい。

参考文献

1. 愛知教育大学附属図書館編（1992）『チェンバレン・杉浦文庫書簡目録』
2. 相原由美子（1973）「バジル・ホール・チェンバレン」、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第三十八巻
3. 池田証寿（2001）「日下部表の話」、京都大学大型計算機センター『第67回研究セミナー報告 東洋学へのコンピュータ利用』
4. 池田証寿・高田智和（2003）「漢字字体規範研究から見た国語国字問題関係資料の再検討—「漢字御廃止之議」と「三千字字引」とを例に一」、韓国日本学会編『日本学報』第57輯1巻
5. 上田敏（1899）「文字のしるべ」、帝國文學會編『帝國文學』、(『最近海外文學 續編』に再録、1902年)
6. 大西雅雄（1941）『日本基本漢字』、三省堂
7. 岡墻裕剛編著（2008）『『文字のしるべ』影印・研究』、勉誠出版
8. 加藤正信（1989）「常用漢字の字数・字種・字体」、佐藤喜代治編『漢字講座11 漢字と国語問題』
9. 日下部重太郎（1913）『現代の国語』、大日本図書
10. 日下部重太郎（1920）『實用漢字の根本研究』、中文館書店

11. 日下部重太郎 (1933) 『現代國語思潮』続編、中文館書店
12. 熊沢精次 (1991) 「一六世紀から幕末開国期までの日本語研究と日本語教育」、木村宗男編『講座日本語と日本語教育 15 日本語教育の歴史』、明治書院
13. 呉美慧 1988 『英和对訳袖珍辞書』の訳語に関する一考察—メドハーストの『華英字典』との関係—、国語学研究と資料の会編『国語学 研究と資料』12
14. 佐佐木信綱編 (1948) 『王堂チェンバレン先生』、好學社
15. 塩山正純 (2003) 「S. W. Williams の『漢英韻府』について」、愛知大学国際コミュニケーション学会編『文明 21』10号
16. 杉本つとむ (2008) 『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史』、講談社
17. 武内博編 (1995) 『来日西洋人名事典』増補改訂普及版、日外アソシエーツ
18. 野村雅昭 (2008) 『漢字の未来 新版』、三元社、(初版：筑摩書房、1988年)
19. 早川勇 (2006) 「和英辞典の歴史」、愛知大学語学教育研究室編『言語と文化』第14号
20. 福澤諭吉 (1925-1926) 『福澤全集』時事新報社
21. 報知新聞社「三千字字引」、1887 (明治20)年11月27日「郵便報知新聞」第4447号付録
22. 松村明 (1980) 「解説」、ヘボン『和英語林集成』、講談社
23. 宮田和子 (2010) 『英華辞典の総合的研究—19世紀を中心として—』、白帝社
24. 村岡典嗣 (1935) 「日本學者としての故チャンバレン教授」、東北帝國大學文科會編『文化』第2巻第5号
25. 森岡健二 (1991) 『改訂近代語の成立 語彙編』、明治書院
26. 吉田澄夫・井之口有一編 (1962) 『明治以降国字問題諸案集成』風間書房
27. 陸軍中央幼年學校編『送假名法漢字用例』(陸軍幼年學校、1906)
28. Anthony, Brother (2010) *The Early Years of the RASKB: 1900-1920*, "Transactions of the Korea Branch of the Royal Asiatic Society" 85: 131-149
29. Aston, William George (1877) *Grammar of the Japanese Written Language*, Lane Crawford
30. Brinkley, Francis (1896) *An unabridged Japanese-English dictionary, with copious illustrations*, Sanseidō
31. Chalmers, John (1882) *An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms: after the Shwoh-Wan 100, A. D., and the phonetic Shwoh-Wan, 1833*, Trübner, Kelly & Walsh, John Avery
32. Chamberlain, Basil Hall (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*, London, Trubner, Hakubunsha.
33. Chamberlain, Basil Hall (1899) *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*, Kelly & Walsh
34. Giles, Herbert Allen (1892) *A Chinese-English Dictionary*, Kelly & Walsh
35. Hepburn, James Curtis (1867) *A Japanese and English dictionary: with an English and Japanese index*, Trübner
36. Lay, Arthur Hyde (1895) *Chinese Characters for the Use of Students of Japanese language*, Shueisha
37. Williams, Samuel Wells (1874) *A syllabic dictionary of the Chinese language: arranged*

according to the Wu-fang yuen yin, with the pronunciation of the characters as heard in Peking, Canton, Amoy, and Shanghai, American Presbyterian Mission Press

参考サイト (2014年8月10日閲覧)

38. “CiNii Books”, <http://ci.nii.ac.jp/books/>
39. “Janus Home Page”, <http://janus.lib.cam.ac.uk/>
40. “Royal Asiatic Society-Korea Branch 왕립아세아학회 한국지부”, <http://www.raskb.com/>
41. “RASKB History 1900-1940”, <http://hompisogang.ac.kr/anthony/RASKBHistory1940.html>

付記

本稿は、JSPS 科研費 25770173 「近代日本における基本漢字文献の基礎的研究」の助成ならびに新村出記念財団第二十七回研究助成を受けて行った日本語学会 2014 年度秋季大会における発表を元に、大幅に加筆・修正を行ったものである。発表に際して、貴重なご意見・ご指導を賜ったことに感謝する。なお、本稿で用いたデータは次の URL で公開中である。

(<https://sites.google.com/site/jishudb/> 期間限定、公開終了時期未定)